

聖書：ルカの福音書 22 章 1～13 節

説教：過越の小羊

1 過越

1) 出エジプト記 12 章

1 節に「過越の祭りといわれる、種なしパンの祝いが近づいていた」とあって、今日の箇所は過越の祭りとして深いつながりがありそうなので、まずそのことに触れておきます。

話は、モーセがイスラエルの民を引き連れてエジプトを脱出するところまでさかのぼります。エジプトの王であったパロはイスラエルがエジプトを出て行くことを認めません。いろいろなことがあって、十番目のわざわいが及んだときのことで、そのわざわいは、エジプトに住んでいるすべての初子が殺されていくもので、エジプト人はもちろんですが、何もしなければイスラエル人も巻き込まれてしまいます。そこで、神はイスラエルがこのわざわいから逃れることができる方法を教えました。どうするか。家ごとに傷のない雄の羊をほふり、その血をとって二本の門柱とかもいに塗る。主はその血をご覧になると、何もしないでその家の前を過ぎ越される。そうやって過越の準備をさせ、結局イスラエルは無事に脱出を果たすことができました。これが過越の由来です。

2) 小羊がほふられる日

イエスの時代も過越の祭りが祝われました。7 節。「さて、過越の小羊のほふられる、種なしパンの日が来た。」原文に即して言い直すとこうなります。「種なしパンの日が来た。その日は、小羊をほふらなければならない日である。」

イスラエルの民は小羊をほふり、その血を門柱とかもいに塗ったおかげで、エジプトから救い出されました。救われるためには小羊がほふられ、血が流されなければなりません。過越の祭りになれば小羊が必ずほふられ、人々は神の救いを思い出しながらお祝いの食事をしました。

その過越の祭りのとき、イエスの周りでどんなことが起きていったのか。ここに二つのことが書かれています。

2 二つの過越の準備

1) 金を盗んでいたユダ (ヨハネ 12 章 6 節)

まず、一つ目のことが 3, 4 節にあります。「さて、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った。ユダは出かけて行って、祭司長たちや宮の守衛長たちと、どのようにしてイエスを彼らに引き渡そうかと相談した。」

祭司長たちはずっと以前からイエスを殺そうと考えていました。イエスがエルサレムに入り、宮の中で商売人たちを追い出したのを見てから、宮の守衛長たちもイエスの勝手な振る舞いに腹を立てていました。祭司長たちと宮の守衛長たちの利害は一致し、手を組んでイエスを殺そうと相談します。

しかしすぐに壁にぶつかりました。こんな事情があったからです。過越の祭りが近づくとつれ人々の心は、神の国であるイスラエルをもう一度取り戻したいという願いでいっぱいになってきています。そんなとき、イエスがエルサレムに入って来られました。コン

サートのライブ会場に見立てれば、大スターが舞台上に登場するときに観客が総立ちして拍手喝采をする。そんな興奮状態です。とても人々の目の前でイエスに手をかけることはできません。

どうしようかと悩んでいたとき、思いかげなくユダがある情報をもって現れました。イエスが群衆から離れてひとりぼっちになる瞬間がいつであるか、知りたがっているのでしょうか。お金と引き替えにその情報を教えてもよい。ユダはそのように提案します。

なぜユダはイエスを裏切ったのか。3節にサタンが入ったとあります。ここで疑問が湧きます。なぜイエスはサタンの働きを止めないのか。ユダが悪いのではない。すべてサタンのせいだというのでしょうか。そうではないと思います。サタンは何もないところでは働くことはできません。彼らの格好の住処は人間の罪です。ユダの中に解決されていない大きな罪があったので、そこへサタンが入って来た。そのように見るべきでしょう。

ではどんな罪があったのか。ユダは会計係を担当しており、その地位を利用して金を盗んでいたとヨハネの福音書12章6節にあります。お金のことで弱さを抱えていたようです。人々の前では良い弟子を演じていても、人のいないところで罪を繰り返します。イエスのことばが罪の心をいらだたせます。とうとう、金と引き換えにイエスを殺してもかまわない、とさえ考えるようになります。ユダの思いかげない申し出に祭司長、宮の守衛たちは大喜びです。こうしてイエス殺害計画は大きく前進することになります。これが一つ目の出来事です。

2) ペテロとヨハネ

次に、イエスが過越の食事の準備をさせるためにペテロとヨハネを遣わしたこと、それが二つ目になります。町に入ると水がめを運んでいる男に出会うので、その男について行きなさい。その男が入っていった家の主人に尋ねなさい。そうしたら、席が整っている部屋を見せてくれますから。ふたりが行ってみると確かに言われたとおりでした。こうして過越の食事の用意をして、イエスとほかの弟子たちの到着を待つことにしました。

イエスが、なぜこのような方法を取られるのかはわかりません。でもこのことから二つのことはわかります。一つ目は、イエスはこれから先に起こることをすべて知っておられ、コントロールしている。二つ目は、過越の食事の準備をするよう指導したのはイエスであったことです。何気ないことですが、これが後で大切なポイントとなっていきます。

3 過越の小羊キリスト

1) ひとりぼっちになるイエス

さて、もう一度ユダのことに話を戻します。一つの質問をしてみます。「どうしてユダは、この過越の祭りのときにイエスを裏切ろうとしたのか。」ユダは、以前から祭司長たちがイエスを殺そうとしていることを知っていて、うまくやればこれは金になると気がつきます。どうすれば金になるか。彼らが一番欲しがっている情報を手にすることです。その情報とは何か。イエスが群衆から離れてひとりぼっちになるときはいつか。それが彼らが一番知りたがっていることです。では、いつイエスはひとりぼっちになるか。じっと観察していたユダは、最近イエスの行動パターンに変化が起きたことに気がつきました。イ

イエスは、昼間は宮の中において人々に囲まれていたのに、夜になるとだれもいないオリーブ山に行くのです。それも必ず毎日です。

ユダはこれに目をつけました。オリーブ山であれば、群衆の目を気にしないでイエスを捕まえることができる。これは格好のチャンスです。ユダはこの情報を高く売ろうと計画します。

2) 過越の小羊を用意なさい

イエスは自分が夜オリーブ山に定期的に出かけることが、どれほど危険なことか、気がついていなかったのでしょうか。先ほど見たように、イエスはこれから起きることを何でもご存じの方です。イエスが愚かだったわけではありません。イエスはユダが裏切りやすいようにと、あえてオリーブ山に出かけ、ひとりぼっちになる時間を作っていた。そうすることで、この方は十字架におかかりになる準備を進めていたのです。

パウロは、Iコリント5章7節で「私たちの過越の小羊キリスト」と呼んでいます。今日の箇所をよく見ると、イエスは二つの準備をされていたことに気がつきます。一つは言うまでもなく、ペテロとヨハネを遣わして過越の食事の準備をさせることです。もう一つは、ユダの裏切りです。ユダが裏切りやすいように、あえてひとりぼっちになる時間を設けていたのです。過越の小羊はこんなふうにしてユダの手で準備されていきました。

3) 過越の小羊を用意するユダ

そのユダのことでは、いろいろな疑問があります。その中で最も典型的なのはこうです。「神の計画を実現させるために、ユダはまるで使い捨てのぞうきんのように用が済んだ

ら捨てられていく、神はそんなふうユダを見ていたのか。私たちがユダと同じような扱いを受けるとするなら、そんな神など恐くて信じたくない。」切実な疑問だと思います。

こう考えたらどうでしょうか。ユダは私たちと関係のない悪人なのでしょうか。むしろユダは私たちを代表しているのではないですか。私はユダを見て、自分も子どもの頃、親の財布からお金を盗んでいたことを思い出します。親に内緒で高い買い物をしてしまい、心配した親が学校の先生と相談していたこともありました。子どもだろうが大人だろうが盗みは盗みです。ならば私はユダです。ユダと同じ罪を抱えています。ユダは神を売り渡した悪人である。もしそう言うのなら、私も神を売り渡した悪人です。みなさんはどうでしょうか。

イエスを売り渡した悪人はどうなるのでしょうか。イエスはどうされましたか。ユダの手にかかって十字架に進もうとされました。それは何を現しますか。主は、私たちの手にかかって十字架に進もうとされているということではないですか。自分はイエスを売り渡した者だと、もし告白するなら、あなたは十字架と関係を持つことができる。十字架と関係があると言うのなら、あなたはキリストの血によって救われる。ユダのことを通して、主はこのように恵みを示して下さっていると思うのです。

モーセは、出エジプト記12章3節で命じました。「イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意なさい。」私たちは、この命令のとおり過越の小羊を用意した者であることを告白したいと思います。